關西大學新報

発行所
大阪市大淀区長柄中通
関西大学天六学舎内
関西大学新報社
電話 堀川(35)2072番
発行人 秋田 進晤
編集人 筒井 孝一
（定価一部十円）

自治委会22日に招集

代行委員長の選出など

執行部では、去る五日、今年度最後の自治委員会を、来る二月二十二日午后六時より開く旨、各自治委員に対して通知を発送した。招集議題は、①執行委員長代行選出②昭和三十七年度選挙管理委員選出③昭和三十五年度監査報告④昭和三十六年度活動経過報告⑤その他となっている。

学友会規約によると、自治委員会は毎月一回以上開かねばならないことになっているが、今年は、ほとんど定足数不足で流会を続けており、成立したのはわずか四回だけである。これが秋季学生大会が開けなかった大きな原因となった。

今回は年度内最後のもので、執行部は各委員に委任状の葉書をそえて招集状を送付している。

執行委員長代行は、現委員長の卒業による空白をうめるために選出されるもので、例年執行委員の互選によって自治委員会に提案されており、新執行部が生れるまで、新入生対策、自治委員選挙など重要な学友会活動の執行を担当することになる。

選挙管理委員は、自治委員の選挙をはじめ選挙規則に定める一切の選挙を管理するもので学生部毎に一名づつ選出される。

三十五年度監査報告は、本来は春の予算審議前に出されて、予算案とともに春季学生大会で承認を得るべきものが、実質的に一年遅れたもので、すでに今年度予算の執行を終つた後だけに不正支出の没収規定の適用などについて問題が提出されるであろう。

今年度活動経過報告は、執行部が行なうが、自治委員会の流会の続いたことや、秋季学生大会が開かれなかったこと、あるいは検定料値上げや政暴法阻止闘争などが不充分であった点などが議論の中心になるものとみられている。

古本全般売買
天牛本店
南区道頓堀中座前
電話(75)二七五八番

競争率二部は平均二・五倍

第一次入学試験行わる

三十七年度本学第一次入学試験は去る二月十日より五日間、千里山、天六学舎および地方数カ所においていっせいに行われた。

まず十日の経済学部を皮切りに次いで商学部、文学部、法学部、工学部の順で一日一学部づつ行った。

全体的に、今回は昨年とほぼ同程度の応募者数で、経済、商学部は一、二部とも競争率が上昇しており、法、文学部はやや減少している。また、工学部は、昨年より一％程度上昇した程度で他大学の工学部に比して低い。

二部の平均競争率は約二・五倍、一部では約八・二倍であるなお、合格発表は今月二十八日の予定。

二次入試は三月二十一日

第二次試験は、一、二部とも三月二十一日で、三月一日より十九日まで願書を受け付ける。

日中友好協会の関大二部班結成

本学二部現中研（部長名倉任）を中心としてこのほど日中友好協会大阪府連大淀支部関大二部班を結成し、一般学生に加入を呼びかけている。

なお、部長の名倉君は同班長支部書記局員を兼ねている。

37年度入学志望者数（第一次募集）

学部	（一部）志望者	定員	競走率	（二部）志望者	定員	競走率
法	2,645	400	6.6	716	300	2.4
経	5,039	400	12.4	774	300	2.6
文	1,922	300	6.4	291	150	1.9
商	4,013	400	10.0	546	150	3.6
工	2,065	400	5.2			

論説

再び学友会活動の反省を

予算審議と、三十五年度会計の未監査の問題をめぐって、騒然たる中にスタートした本年度学友会活動も間もなくその活動期を終えようとしている。

自治委員会の流会続き、秋季学生大会の未開催など、その活動は停滞の一語に尽きるようで、学友会の歴史に汚点の一頁を加えることになったわけだが、ここに、その跡を振り返りながら、問題点をさぐってみたいと思う。

昨年度は、不当人事、安保、授業料など重要な闘争がつづき、それらを通じて、組織内における各々の政治的立場の相違がかなり明確になっていただけに、今年度の自治委員選挙は、そうした立場の相違を一応表面に打ち出して選挙戦がくりひろげられたはずであった。しかしその結果は、授業料闘争で多数の支持を得ていた当時の闘争委員長が、自治委員に落選したことにもみられるように、客観的に見て、決して前年度の活動に正しい評価が下されたとはいい難い面もあったようだ。

それが一部にいわれているごとく選挙の不正によるものであるかどうかは別として、投票する学生は候補者について、具体的な資料を、ほとんどもっていなかったといえるのではないだろうか。自治委員の選挙が学生の正しい意志の集結でなかったというようなことをいったら、おそらく各方面から非難がおこるであろう。今年度の自治委員が、立派であったとはいえない。

この一年間を通して、委員会が成立したのは、わずかに四回。第一回目は執行部選出、二、三回は予算案審議、四回目は学園祭の開催とその予算配分を内容とするものだった。第一回目を除いて、予算を含まない委員会は、すべて流会したわけである。このことは決して偶然のことではない。

予算といえば直接にはクラブに関係したものである。クラブ予算が決して一般学生に無関係であるとはいわないが、自治委員諸君が、一般学生の利益のためにクラブ予算に熱意を示したとはいえないようである。

その証拠には、全体の利益に密接に関係する問題であっても、政暴法や検定料の値上げ阻止、原水禁などには、全々取り組まなかった。

組織の権力をとり、予算をもって帰れば一般学生には用事はないといった態度である。これは前年度の監査をしないまま新予算を配分してしまったことや、秋の学生大会を開かなかったことなどに端的に示されているとはいえないだろうか。

今年の学友会活動が予算配分と学園祭の執行だけに終わって、一切の活動を放棄したことは、全学友に対する裏切りとして強く非難されなければならないが、同時に、予算配分における極端な不均衡が、正常な部活動に重大な支障を期していることは、全学の利益の立場からも見逃すことはできない。文化系クラブの活動の不振の原因の一つが個人負担の限界を越した予算不足にあったことは事実であろう。

なお配分の基礎になった予算総額そのものが、新報の購読料を学生の承諾なしに組み入れられている案で基本的に不法、不当なものであったことも忘れてはならない。全員購読制の存在していたことは争いのない事実だし、購読料が百円であったことも、当該制度が実施された年度から学友会費が百円増えていることからも明らかである。この購読料が規約に明記されていないのでその額は不明であるとの意見があつたが、制度廃止の理由が、新報社の政治的偏向〃であつたことからして、新報が他の部とは異つた基盤の上に運営されていたことを前提とするものであったはずだ。

単に学友会費の一部が購読料に配分してあるというだけなら、新聞は他の部の機関紙やアジビラと同種のものであって、〃政治的偏向〃が予算増減の理由になるはずがないからである。学問の場においてイデオロギーによって差別を受けてはならないのである。新報が〃中立〃を要求されるのは、学友会費とは別個の購読料に支えられていたからであって、全員購読制が廃止されたというのであれば、当然購読料の額だけ学友会費が安くならなければならない。その額が百円であったことも制度発足当時の記録と当事者に聞けば明らかなことである。

したがってわれわれは、この購読料を学生の承認なしに他のクラブへ配分して組まれた全体予算は不当であり、五百円の学友会費が徴収されている以上購読料は従前通り徴収されているものとして、今年度は全員購読制は存続していたものであるとの主張は、今なお変わっていないのである。

以上予算を中心にして問題点に触れたが、この他全ゆる面で前例のない多数の横暴が見られたのである。われわれ学生一人一人が主権者の立場でよくこの一年を反省し、来年度再び今年度の誤ちを繰り返すようなことがあってはならない。

博物館学課程の科目開設要求

学芸員希望の学生から

このほど文学部学生の間から、学芸員の資格に必要な博物館学課程の単位を、二部学生にも取得できるようにしてほしいとの声が高まり、有志学生によって、その運動がすすめられることになった。

博物館や美術館、資料館などに勤務する学芸員の資格を取得するためには、学士に必要な単位の他に視聴覚教育（本学では図書館学二）文化史、美術史、考古学などとともに、博物館学の講義と実習、及び社会教育概論の科目を履習していなければならない。

ところが本学二部においては、必修である博物館学と社会教育概論の二科目が開講されていないため、学芸員資格を受けることができないという。

このため資格取得を希望する有志学生によって文学部長や法文事務長と交渉が行なわれたが結論が得られないため、〃この要求は二部学生の当然の権利である〃として、広く一般の学生にも呼びかけ、署名を集めて、「二部にもこれらの講座を開講するか、一部での受講を無条件に認めてほしい」との要請書を作成、正式な交渉委員も選出して運動を展開することになったものである。新学期も近ずいているだけに、早急な解決が望まれている。

来年度就職態勢きまる

—就職課—

本学就職課では、三十七年度就職希望者について例年通り、次のように手続を行っている。

まず、先月十六日より今月三日までに用紙の交付を終り、十九日より三月十日まで登録受付、面接期間は四月二日より末日まで。

また、就職模擬試験（英語）（専門論文）を二月二十五日（月）に実施し、受験申込期間は二月一日より十七日までである。

就職課では、この就職模擬試験を就職希望者全員受験するよう望んでいる。

学内告知板

学年末試験終了後期休暇中の第二学生課の事務取扱時間を左の通り致します。

記

一、日時　二月二十日より四月七日迄、午前九時より午後七時迄、但し、窓口事務取扱は午後六時迄とす。

第二学生課

再告

先般来より再三掲示または新聞告知板等にて御知らせしました新年度の学生証作成に要する写真提出台紙及び学生カード（B）の交付を受けていない人が多く見受けられますので早急に受理下さい。

写真及び学生カードの提出締切りは二月末日までです。なお期日までに提出なき場合は学生証の発行が遅れます。

第二学生課

行事日程

二月十九日　学年末試験終了
三月十三日　卒業決定者発表
〃十三、十四日　追試受付
〃十五～十七、十九、二十二日　追試験
〃二十日　卒業式　法・文、午前十時～経・商、午後一時～

なお本年度卒業式は、今までの一、二部同時に行っていたのを本年度は、一、二部別々に行うもので、同一日に時間を分けて行う。

再入、復学手続

▼在学生で、除名、休学者の再入復学手続きは開講日（四月十三日）までに諸手続きを完了すること。

第二事務室

お知らせ

本年度学友会活動も残すところ少なくなりましたが本紙も本号をもって三十六年度の予定発行を終え、三月号は休刊します。

本年度は予算の不足から十分なる紙面ができませんでしたが、学友の皆さんの直接間接の御支援と御協力に対して深く感謝します。

関西大学新報社

記者の眼

〃喰い逃げ〃は許せぬ

○…十日より三十七年度本学入学試験が行われ、その間、在学生は学年末試験が休みだったので内心ホッとしているところだろうが、当の受験生、全くの真剣そのもの。毎年思うことだが受験生の年齢の若返りである。去年よりも本年は学生服のいわゆるストレートらしきのもが多く、学内にも新しさを迎えるふん囲気をつくっている。

しかし、この反面三十歳を越えた人も混じっておりこの人たちにはいまさらながら敬意を表さねばならない。また、競争率も、二部については、ほとんど昨年と変わりなく、商学部がやや高くなった程度で平均二・五倍くらいである。いずれにしても、この人たちの入学されんことを願いたいものだ。

○…一方、これらの受入れるべき学友会も、この人たちのスタートであった検定料を、うやむやのうちに四千円にさせてしまい、また他の活動においても予算、学生大会、政暴法闘争などについて、全く反動的動き表面化し、一般学生の利益と学内の民主主義を侵してきた。

そして、ついに執行部はこれらの総決算であるべき秋季学生大会をも自治委員会の不活発、流会を理由に開かず、ほとんど一年を終え、その収拾もつけずに今日に至っている。

昨年十八日にも定員不足で流会し出席者のみで今後の対策を講じ、次回に是非成立という結論だった。

○…そこで来る二十二日に開かれるのであるが、代行委員長、選管員の選出三十五年度監査報告、経過報告など重要な議題が列挙されている。ここで最も大切なことは、学友会活動において大きい汚点の一番バッターの役割を果した監査は報告である。もっとも監査報告本年の予算決定前になさはれるのであるが、この結論を出さずに一方的な予算を強行し、今ごろ、やっと自治委員会に報告される。

しかし、この監査報告では、より一そう真剣な態度で追求し、論議し、不正は不正として、その責任の所在と措置を講じてもらいたいものだ。

そして良識ある対策が要求されると同時に今日まで監査報告の遅れたことについての監査委員の責任と学生大会について自治委員会の招集もなさなかった執行部の不誠意に対する責任は大である。

このような中で今年の学友会の〃食い逃げ〃は許せぬと学生の声があがるのも当然の論である。

学声春秋

▼はやいものである。初めて天六学舎を訪ずれたのはついこの間のようであるが、こうして卒業を間近かにひかえてしまうとホットしたという心とともに、その心のどこかにふと淋しさがまじ合ってくるから妙である▼ともかく、やっとこさ卒業へこぎつけた春秋子であれば、安緒に似たその喜びもなおさらのことであるが、ここまでたどりついたのはともかく健康であったという一言につきよう。▼また春秋子などは比較的恵まれた学生の一人であったが、それでいても職場との板ばさみになったこともシバシバであることを考え合せると、中小企業に働く人たちはそのヤリクリに骨を折ったことであろう。その他、家庭の事情、経済的な理由から学園生活を放棄しなければならなかった友も幾人となく私のまわりにいたようである▼いまここに天六学舎を去るにあたってそのような友とともに喜びを分けあうことのできないのを残念に思う▼それを考え恵まれた自分であり、四年間ものあいだで苦しみぬいたことも、今はほほえみでもって思いうかべることのできるのをうれしく思う▼そしてその一コマ、一コマでつづった学園生活の歴史を一言にいい表すことのできないのをまどろしくさえ感じてる。▼しかし、ここで強調できることは苦しかったにせよこの学園生活における自分たちは、苦学生とか夜学生とかの言葉から来る暗いイメージをつとめてはらいのけて、伸び伸びと学生気分を満喫するようにつとめ、時には天六の商店街や、阪急の近くで酒をくみ交わしつつ、大声で議論し合ったものだ▼しかし、それでいてもふりかえってみれば、全てが希望に満ちた学園でなかったことが確かである▼入学前後にみられた沢村事件、あるいは進歩的な教授を圧迫しようとした不当人事問題、なかんずく残念に思はれたのは、授業料値上げにおける理事者とそれに迎合した一部学生の動きであり、今年の執行部の学生の本分を失ったそれは、今さら失望以上の何ものの感情もおこってこない▼しかし未来への希望はいまだ絶えていないものと信じたいし、あの安保闘争のさいにかかってない大規模な行動で御堂筋をデモンストレーションした民主的、進歩的な伝統は決して絶えていないこと、その底に依然として新しい息吹きが流れているように思える。▼一昨年を頂天として除々に失われつつある民主的思想であるが、この学園を去るにあたって今こそ建学の精神を思いおこそうと呼びかける次第である。〃正義を権力から守れ〃

近代知性の源流

非相称的展示

フランス美術展について

ルーヴルを中心とする「フランス美術展」は前回五四年の「ルーヴル展」以来の期限の長い大望の約束事であった。第一回のルーヴル展には相当の批判もあったが、第二回目となったフランス美術展は、ルーヴル美術館その他の内外不出の作品まで、いわゆるドリームプランを殆んど実現した特別展で、これを鑑賞した仏人でさえ「こんな展覧会ははじめてだ」という程、現地フランスに長くてさえ望めぬもので、フランス側の力の入れようが判る。今回の「フランス美術展」は前回の「ルーヴル展」がルネサンスより十九世紀に至るフランス美術の足どりを概観したのに対し、仏七月革命から現代まで、（一八四〇年～一九四〇年ころまで）の歴史のテンポをあとづけている。近代美術の誕生から印象主義、フォービズム（野獣派）表現主義、新現実派、立体派、ダダ、超現実派、抽象派と、目まぐるしい展開のあとをみせるこの大規模な展覧会は、仏国においても又初めての試みということである。

今回のフランス展を演出したパリ国立近代美術館次長のB・ドリバル氏は東京展の折に「作品は本当にフランス美術を代表するものだ。一点一点慎重に選んだ自信のあるものだ。

今度の特別展では、フランス美術史上でも最も多彩ないわゆる黄金の百年が対象です。その多様性を表現するために、展覧会の各部室、あるいは時として各壁面の色彩や機質感を変えてみました。各時代を象徴するよう考へたのです。トラクロワの部室は豪華でロマンチックな赤を、キュービズム（立体派）では知的な鋭さを現わすために黒を……といった具合です。作品の展示には、近代の絵画自体均衡を破いたダイナミックなものを目指しているので、展示に左右対称的な均衡を与えようとしても不自然になる。西欧では左右非相称の展示が主流で、ドガ以来不均衡の美は日本の浮世絵が教えている。観客の点では前回よりも強烈な知識欲が感じられる。これはフランスでもないことだ。日本人は芸術に対して深い尊敬と知的な好奇心を持っている」など述べている。

展示数は、カモンドコレクションの分解を許さないものなど四七八点、展示室二九室。第一室はドラクロワ、クルーベ、ミレーの近代フランス美術の先駆者と目されている人々の作品が展示されている。フランス革命によって活動的な洋服が発明され、働かざるもの食うべからずの思想が芽生えて、美術を特権階級の独占から民衆の欲求に応えた。ロマン主義がドラクロワによって旗上げされた。「自由の女神」はその代表的なもので、展示にはドリームプランの「狂えるメデア」や情熱的な「アルジェリアの女たち」など鮮明な色彩で大ドラマのクライマックスを描く方法をとりあげている。クルーベルはそれまでの観念を打破して、絵にならないといわれてきた労働者の姿を典型的に描いている「石割り人夫」はそのけっ作で現実に根ざすネオ・リアリズムは彼から出発する。

構図においては古典的、色彩は単調、彼は一八五五年に「自分の時代の風俗思考、展望を表現してゆく」と宣言している。自然の静けさに没入するフォンテンブロー森のバルビゾンに集まる人たちにはコロー、ミレー、ルソー、デュプレ、ディアスードーウニーがある。これまでミレーとコローはバルビゾン派とされてきたが、「フランス美術展」ではミレーは古典的であるがこれはむしろ宗教的感傷をもった一つのロマンチシズムであり、クルーベルらに対して褒向きの写実である。コローは光の変化を求めた画家であり、印象派の濫觴であるとしてはっきり区別されている。印象派は現代の絵画に直接つながっていくものである。それまで名画の色彩はむしろ薄暗いものとされてきた。時間の経過やニス焼きが変色させてきたが、印象派はこれを強力に打破し、モネは「色彩形態は光によって変化する」と主張している。モネのコレクションは「松方」が優れているが、美術展はその重複をさけて、赤の使われた珍しい作品「チューリップ畑」が出品されている。印象派第一回展に出品しながら、外光をあまり追求しすぎたために、永遠の概念が忘れさられ、その止揚はゼザンヌにおいて決定的で、印象派の分析、解体に対して、総合、構成をもたらした。彼は内部に一九世紀フランス絵画史をそのまま背負っている。出品作品の「青い花瓶」は構成において静物画の傑作であり、人格の深さがしられる。彼にピカソ、ブラック、ルノアールが影響をうけている。一九世紀末の創造的精神を築いたセザンヌらに対し、世紀末の病患を現わしたものにロートレックがいる。マンモルトルを中心に庶民生活の自由を表現しようとした。この頃は日本の浮世絵、版画はフランス絵画に大きな力で影響した。マチスの作品「装飾模様の女」は多分にその影響がみられる。色の構成で描いた画家達にはマチスの他デビュー、ゴッホ本能的抒情を求めたゴーギャン。

二十世紀に入るとピカソ、ブラックの作品がある。物体を円、三角形に分解し構成する方法で描き、象徴画へ発展していく。「自然を円筒、球、円錐として扱う」というセザンヌの手紙が啓示を与えている。アポリネールの異端の詩、遠近法絵画の視覚的現実の錯覚を教えたプランセ、セザンヌの造形思考、黒人彫刻の原始の生命力、複雑な性格をもったキュービズムは危機の時代の人間内部に密秘様々な矛盾を描き出そう、新しい現実にふれようという意志が働いているし抽象芸術とダダ、シュールリアリズムの道が暗示されている。その他美術展にはモリジアーニシャガール、ユトリロの作品が、「作品には作品の心がある」ことを訴えようとしている。

「フランス美術展」はこのことを訴えるために近代美術の先駆者達の等一室は赤、コローと印象主義の先駆者の第二室は黄味のおだやかな色彩、第三室は明るいカーキ色、第四室マネとドガはクリームとグレイ、キュービニスムの部室は沈んだ感じの配色、材質にはビロード、絹、檜板、スノコ、障子とオブジェックである。

近代の百年の美術の創造精神を適格に訴えかける特別展は、根なしカズラの不安を覚えるわれわれの精神史を省ることにも、日本的な感受性と西欧的な知性との統合にも、慰さめと励しをうけるものであろう。近代美術への好否にかかわらず、世界的な催物となった「フランス美術展」の鑑賞は見逃してはならないものの一つではないか。（く）

カットはシャヴァンヌの「化粧」の部分。下の写真は物議をかもしたモネの「草上の食事」

時評

盗作から改憲まで

文学部教授　金戸嘉七

デザインの盗用などはしょっちゅうの話である。音楽や絵画、創作といった部門にもときどき問題が起る。歌会始の歌に盗作がでたから、ジャーナリズムの採りあげるところとなっただけで、仲間うちでは短歌や俳句の盗作は、古来からザラにある話である。賞めた話ではないけれども、短歌にはもともと「本歌どり」という、いわば盗用御免の認められていたことさえある。こう書いてしまえば身も蓋もないことになるが、日本の伝統として命脈を保っているものの中には、他人のものの上に自分を重ねあわせる、盗作と紙一重のものにたいする非常の寛容があった。それがむしろあたりまえのことと考えられてきた節すらあるのである。だから、たとえそれが発見され、指摘されても、その非難は手ぬるいわけであった。

世間がこんな問題に敏感になったのは、西欧の思想に接してからのことで、もっと端的にいえば敗戦後の話だといってもよいくらいである。もちろん井上某の盗作のごときは、そうしたことを論ずるよりは精神病理の問題のようだが、かれをそうした精神に導いたのは、やはり世間の寛容に由来する点多々あるであろう。事柄はとるに足らぬ一般的な盗作にすぎないが、逆にいえば、こうした日本的寛容にたいする警鐘の意義をもっていたといえぬこともない。

短歌や俳句に意識的な盗作のほかに、無意識な暗合があるのは、他の芸術作品の場合と比較して、理由のないことではない。第一にこの両者はリズムを根幹にもち、第二にたいへん収約された形式をもっている点である。こうした形の上の短かさは発想か表現かのどちらかが類似する暗合を生ずる可能性を内包する。この場合は発表の日時をもって判定の基礎とするほかにないが、この暗合と盗作のけじめがつけがたいところにも、盗作者の気もちを楽にするものが潜んでいるとおもわれる。

以上に述べたことは、いずれも伝統的な短歌や俳句についての話で、前衛的なそれらには無縁なことである。それというのも、前衛派はどうした理由か言葉の上では短歌とか俳句という伝統的なものを流用しているが、そこには負ぶさるべき過去がないし、またかれらの作品は自身の精神の内部を吐きだしてみせることを念としているために、他人の作品と重なりあう必要がないからでもある。だがかれらの作品でも、社会とかかわりあおうとすると、その瞬間から作品の類似性が生ずるおそれがある。それは日本独自のかなしい姿をもった芸術といわなくてはならない。

だが、果してこれは如上の芸術部門のみが負うた現象であろうか。盗作とそれにたいする寛容は、いわば日本人にとって宿命的なものであり、いまにして自覚と反省がおこなわれなければ、ゆゆしいことが起ってくるのではあるまいか。文学の問題とはかけはなれているようだが、ようやく表面化しょうとしてきた憲法改正ひとつをとってみても、戦後の解放から産みだされた現行憲法は、いま根強い伝統派の力のもとに、「改正」という名で、明治憲法の「盗作」がおこなわれようとしている。短歌や俳句の場合とはちがって、ここでは字句通りの盗作はおこなわれない。上述の理由でそれは形がそのまま盗むには不適当だからである。だが発想を盗むもとよって、その本質を変換するは、法律技術者たるかれらにとってたやすいことである。しかもそういった盗用に寛容である日本人の精神に信倚して、かれらは着々と改憲準備をすすめているのである。明治憲法のいかめしさを口語化し、押しつけ憲法という非難を与えつずけた現行憲法の字句に手を入れることで、かれらの精神的盗作は完了するのである。これは歌会始の盗作のような、ばからしい話とは本質的に異る重大事である。わたしたちはここでとっくりと考えてみなくてはならぬ。

そうして、こうした重大事にめざめるところから、日本人のもつ精神的な弱点が始めて是正されてくる。「伝統」という言葉の本質への理解も届いてくる。それでなければわれわれはいつまで経っても伝統のとられ人だ。その第一歩は政治的な盗作を一蹴するところから始まるといって過言ではない。

故山田松太郎教授を悼む

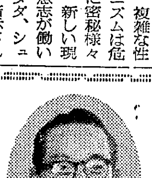
功績残す学生部長時代

文学部教授　小野勇

昭和三十七年、年あらたまる日に忽然と逝去された山田先生の三十五日の法要が二月四日、春立つ日に浜寺のご自宅で営まれた。

一月三日の告別式、二十一日の千里山学舎での慰霊祭と数えて三度私は先生にお別れの合掌を捧げた訳だが、事の余りな意外さに今日も尚、法文学部の研究室の　山田教授」と名札のある室を通り過る毎に、扉が開き先生の颯爽たる姿が「小野君」と呼びかけ乍ら、現れる幻覚に襲われるのだ。

先生の本学との関係は昭和四年以来というから正に三十数年に及ぶもので、特に昭和二十二年には旧制予科の予科長、更に新制大学となってからも、昭和二十四年以来十年に及ぶ学生部長。続いて昭和三十三年以来は就職部長という激職を歴任されている。



（筆者小野教授）

私が昭和二十五年四月本学に移って来たとき、すでに学生部長であった。

同じく英米文学を専攻する後輩であり、後、先生の計画により実現を見た「学生相談室」の委員として、また昭和三十三年には学生部長代理、翌三十四年先生が就職部長に専任された時後を継いで学生部長を拝命した私にとっては自から学生の人格陶冶に於ける重要な場である補導厚生の仕事に対する山田先生の御活躍振りに近く接する機会が多かった。

先生程、大学の発展、大学の将来について常に心を傾注し、様々なる計画を以て大学当局に忌憚なく意見を述べられた方は少ないのではないかと思う。私は日常先生と大学の現状などを語りあう度に、先生の本学への愛情の誠に深いことを強く感じさせられるのであった。特に学生生活の厚生面に於て、先生の企図されていたものは、或は寮の建設となり、学友会活動の育成となり、学生部の新しい性格づけ、その新制大学機構における正しい位置づけ、学生相談室の設置、学外への大学のPR活動等、—勿論大学当局、教授陣、外郭諸団体、また学生諸君等すべての理解と協力があっての事ではあるが他方経済上の悪条件に悩まされながらも—次第に実現を見たのである。これは先生の頭と心と手の勝利であった。

学生部長の後任者としての私は、先生の意図されたものを少しずつ実現する事に努力したに過ぎなかった。既に三回に及んだリーダース・キャンプも、教育後援会の御尽力による合宿施設の完成も、また山の家、更には近日完成する学生会館、体育館等も、その構想は遠く先生在任中に始まっていたといっても間違っていないと思う。

先生の若き日の事は私は知らない。さぞかし美青年であり、さぞかし良き時代に、良き青春を過ごされた秀才であったろうと推察できる。初めてお目にかかった時、先生は五十の坂を越されていたが、なお如何にも良家の御出身らしい若々しさを多分に持っておられた。時には稍気短かにずばりと裁断するようなことばをはいて相手を驚ろかすことがあっても、至極淡白、生来の美質に教養と年輪の磨きがかかって、世にいわゆる「よくできた人」という形容詞が相応しいお人柄であった。

今日にして思えば、それが本学における最後のお仕事となったのだが、先生の学生の就職指導、就職開拓に対する情熱は実に見事なものがあった。就職部が学生部から独立した以後はもち論、以前にもこのおびただしい卒業生を如何に各自希望の職域に送り込むかという難事業に敢然と立ち向われた。

その為には、様々な研究会講座を開き、模擬試験を施行し、多数の学生との面接に当られ、そして一方東奔西走による就職先の開拓等、近くにおってその努力を知る者は頭の下る思いがした。社会の事情の好転も加わって、ここ数年の就職状況の向上は目を見張らすものであるといわねばならない。

先生にかすに尚数年の齢を以てすれば、更に更に本学卒業生の社会進出の基礎は強固になったであろうにと惜しまれる。

三十数年、内外の大学に於て修められた該博なる学識と学生の人格陶冶に対する周到な計画と実行力とを以て本学何万の卒業生及び在学生を育成して来られた先生の余りにも慌ただしい御他界は、御遺族にとっては勿論のことだが本学にとっても量ることの出来ぬほど大きい痛恨事である。

しかし、千百、の繰言も如何ともなす術もないいま、私は眼を閉じてありし日の先生の英姿を思い、眼を開いては先生在天の霊に、なおこの上の良き御指導を賜るやうにお祈りするのみである。嗚

（筆者は前学生部長をつとめた）